

アジト～現代の泊屋～

15. 作品一 99. その他
自力建設 泊屋
秘密基地

居住性

会員申請中
会員申請中
正会員

○河津絢子
塩田 亘
渡辺菊眞

1. 背景と目的

私は幼いころから、ものづくりが好きで、大学に入ってから実際に作るプロジェクトに参加し、ものづくりの楽しさ、完成した時の感動を体験してきた。その経験から実際に自らの手で作ることの重要性を知り、将来、住み手が自分の住まい作りに関わる家づくりをしていきたいと考えている。

しかし、現況は住居という最も身近で大切な場所を、お膳立てされたカタログから選ぶことが主流となっている。子供の頃、秘密基地を作るときに感じたワクワク感、あの感動は家をつくるときにも必要だと考える。

そこで、住み手が自分の住まい作りに関わる家づくりの最初の一步として、自分で作りあげる自分達の空間-「アジト」-を建設する。現代住宅には無い、ワクワク、ドキドキする空間を目指す。

「アジト」は、大学研究室のための空間とする。具体的には研究室のしきたりを学び、杯を交わし合い語り合う場である。高知県の若衆宿に泊屋という物がある。泊屋とは、若者たちが寝泊まりしていたところであり、そこで集落の警備や、村のしきたりを覚え、酒を飲み、語る自分達だけの時間を楽しんでいた。それにならい、本設計は、自力で建設できる『現代の泊屋』を建設する。

2. 工法の選定

今回つくる泊屋は、自力建設できるものとした。

構造は、下部を土嚢造、上部を単管軸組とし木材で壁などをつくる混構造とする。

2-1. 土嚢

土嚢建築は、工法を身につけることが非常に容易で、土嚢袋に土を詰めて作成した土嚢ブロックを積み上げてつくる建築のことである。

土嚢ブロックの強度を上げるため、土にセメントを混ぜ、土嚢リング間の横ズレ防止に、土嚢リングを一層積むごとに有刺鉄線をかます。

また、土嚢建築特有の丸く包み込まれる空間の魅力も、この工法を採用した理由の一つである。

2-2. 単管 木材

誰でもつくる事が出来るためには、材料は手軽に入手可能で、専門的な知識がなくても施工可能であることが必要である。そのため、主な材料は単管,木材とした。単管は、素人でも組むことができ比較的広い空間を作ることができる。

壁は木材で造り、コンパネなど、ホームセンターで買える材料を利用する。

3. 設計趣旨

3-1. 基本方針

自力建設できることに重きを置いた。それは、お膳立てされた物には無い、ワクワクできる空間を造りたかったからだ。出来上がったものではなく、作る過程を経験することによりその思い出が空間に影響を与えると考えた。

家づくりを視野に入れて、居心地の良さを考慮した。手軽に入手できる物で、いかに居心地良くすることが出来るかを考えた。

3-2. 泊屋をモデルに

高知県には浜田の泊り屋という物がある。木造高床式平屋建であり、屋根は入母屋造り棧瓦ぶきである。高床式なのは、監視のためである。

本設計において、参考にした点は、高床式で上部を主空間にしたことと、そこまでは、はしごで登ることだ。新たに導入した点は、土嚢で床を高くすることで、下部の空間を利用できるようにした。

3-3. 居心地の良さ

高温・多雨・多湿の日本では、土嚢だけで造ると採光・防湿の面でデメリットがある。そのため、土嚢と単管を組み合わせる。土嚢で作ることにより、断熱の性能を持たせ、骨組みを単管で造ることで、開口を大きくとれ良好な採光を得る。高床式にすることで、通風を良くし防湿のデメリットを解消する。

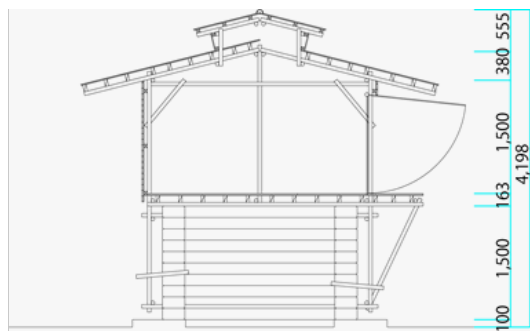
3-4. 平面・断面計画

東西に開口を設けた。これは通風ためと景色を見るためだ。西側の開口からは、以前に大学院生が建設した土囊ドームに夕日が落ちる景色を見ることができる。

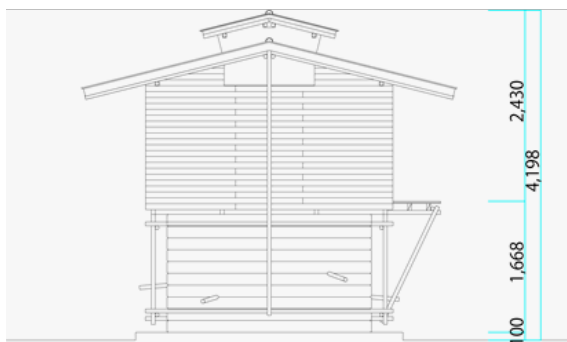
上部は、積極的に光を入れる空間にし、下部の土囊部分はできるだけ光を入れず暗く包まれた空間にした。土囊部分には、上部からしか入れないようにし、外からの侵入は不可とする。外の世界とは区別することで、自分だけの空間を造りたかった。

4. 実施設計

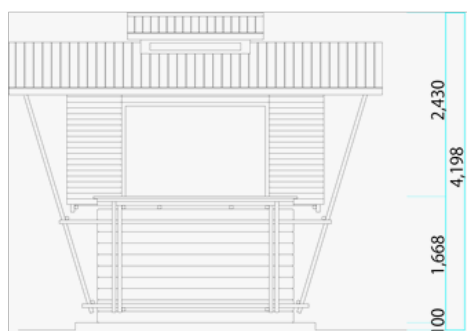
土囊と単管、単管と木材と材質が異なる物の接続の仕方が非常に困難であった。土囊と単管の接続は、土囊の下部に単管を差し込み固定させた。単管と木材は、番線を用いて接続させた。



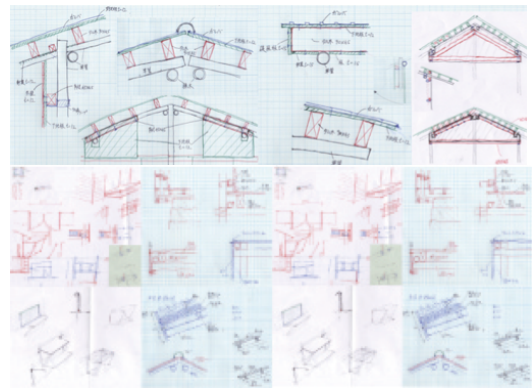
断面図



西 立面図



南 立面図



詳細図

5. 施行

選んだ敷地が畑だったため、基礎を作ることから始めた。土台は三和土で作り、土囊は10段、土台から1500mmまで積み上げた。単管を土囊にきちんとおさえることに苦戦したが、ゴムを隙間に詰めることで対処した。壁は単管やクランプを避けながら合板を貼り、仕上げにはフローリング板を利用した。

6. 竣工写真



南側の開口により切り取った風景は、四季により色づいていく山の木々を見ることができる。西側の開口からは、以前からある土囊ドーム（百牧庵）に夕日が落ちる景色を見ることができる。